Implications of immersion education program for Japanese school counselors: From the experiences of multi-cultural skills program at New York Institute of Technology
2015 Vol.17 p.77- p.88

米国のスクールカウンセラー養成に学ぶ

：ニューヨーク工科大学多文化スキル・サマーセミナーの体験から

伊藤　亜矢子　お茶の水女子大学基幹研究院
初澤　宣子・宮部　緑・菖蒲　知佳　お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
Carol Dahir　New York Institute of Technology

要約

多文化スキルを主題としたニューヨーク工科大学のスクールカウンセラー養成のためのサマーセミナー参加体験を報告し，日本のスクールカウンセラー養成への示唆を論じた。サマーセミナーでは，他文化に関する繊細な感受性と尊重を体験的に学ぶために，イマージョン教育として，マンハッタンとその周辺において，多様な文化的コミュニティを訪れ，多様な文化に触れる体験をした。文化的な差異やそのルーツの多様さに圧倒される体験であり，生徒各人の背後にある文化とその多様性について認識を新たにする体験であった。スクールカウンセラー養成課程の認定制度がある米国と異なり，日本での SC 養成は今後の課題であるが，多文化スキル養成は，コミュニティ・アプローチや学校教育制度への理解等とともに，実践の基盤となるものであり，より実践的な学びの機会の必要性が示唆された。

キー・ワード：スクールカウンセリング，カウンセラー養成，多文化スキル，アメリカ

I. 問題と目的

1. スクールカウンセラー養成という課題

中央教育審議会から「チーム学校」が提唱され，1995 年以来 20 年を経過した日本のスクールカウンセラー（以下 SC）が学校にどう位置づくのか，新たな転機を迎えている。スクールカウンセリング制度の充実には，校務分掌や教育課程など学校教育制度における位置づけと同時に，専門職としての資格や養成課程の充実という課題がある。

たとえば周知のように，米国や韓国，トルコなどでは，教育制度の中に SC が位置づけられており，子ども達の学校生活を包括的に支える支援者とされている。SC 志願者は，カウンセリングやアセスメント等の心理学的な専門知識と教育制度などの学校教育に関する知識を，インターンシップも含めた実践的な養成課程で学ぶ。米国では，Council for Accreditation in Counseling and Related Programs（CACREP）が，全米共通の養成課程基準を示しており，その認定による課程を持つ大学が SC 養成の要を担っている。

本稿では，2015 年 7 月に CACREP による SC 養成課程認定校であるニューヨーク工科大学で実施された SC 養成のサマーセミナーに参加し，セミナーの主催者である Carol Dahir 氏と実践的交流を行うことで，日本の SC の今後の可能性について，養成の面から体験に基づいて考察することを目的とする。

なお，本稿の執筆者でもある Dahir 氏は，米国 SC 協会国家基準（キャンベル・ダヒア，2000）の執筆をはじめ，ニューヨーク工科大学（New

York Institute of Technology 以下 NYIT）の SC 養成課程で長年精力的に SC 養成に携わり，2006 年の Carolyn Stone 氏との来日をはじめ，2009 年，2011 年にはフルブライト専門家派遣プログラム・お茶の水女子大学 COE プログラムで，お茶の水女子大学に計 4 週間滞在し（伊藤, 2007），日本の SC や研究者との交流も継続的に行っている。

2．セミナーの概要

本セミナーは,「多文化社会におけるカウンセリングと文化的コンピテンス」というもので，正規の課程としては 5 日間のセミナーと続く数日の課題から構成されている。実際に文化に浸ること，文献講読，演習，文化教育におけるリーダーによるフォーラムといった多様な手法を併用することで，SC 志願者が，文化的に多様な家族と協働する方法を学び，すべての子ども達に平等な教育経験をもたらすシステマティックな方法を発展させることを目的としている。訓練期の SC は本セミナーによって視野を広め，グローバルな視点から文化的に配慮された介入を，SC の課題や場にそって理解し発展できるであろうし，子ども達の達成や教育機会の均等について現代の社会文化的視点の重要性を検討し理解できる（New York Institute of Technology，2015）。具体的な文化理解体験として，インターナショナルスクールに在籍する移民の高校生による発表や移民を題材にしたパフォーマンス鑑賞，マンハッタンの中華街・トルコ文化センター・ヘブライ教会・モスク・黒人街・ヒスパニック街などに赴いての現地 SC らとの交流やガイド・ツアーなどがあり，イマージョン教育が連日行われる。これらの文化体験に並行して，文化的コンピテンス，多文化理解の教科書講読などの課題によって，総合的に文化的な理解が促進される。

多文化理解というと，日本では必要性が少ないと思われるかもしれないが，たとえば本セミナーの教科書（Spradlin，2012）では，多文化の例として，民族的な出自の他に，社会階層（貧困・労働階級），女性であること，性別違和，発達障害を含む障害，などが挙げられている。現在の日本の公立学校で，これらの多様性が存在しない学級はないのではなかろうか。外国にルーツを持つ子どもの増加への対応ということだけでなく，さまざまな背景を持つ子ども達を支援する枠組みとして，多文化理解や文化的スキル／コンピテンスは日本の SC にとっても欠かせないものと考えられる。

本セミナーは，CACREP のコア領域における，社会的文化的多様性や, SC 領域における多様性とアドヴォカシイのスキルと実践などに位置付けられており，参加学生は，毎日のブログによる振り返りと，5 日間のセミナーにおいて各日に得た生徒理解資源とそれをどう活用するかのレポート（終了後 1 週間以内に提出），まとめのレポート（終了後約 2 週間以内に提出）, 体験を写真や音声を含むデジタル記録にまとめたマルチメディア・レポート（終了後約 20 日間以内に提出）のすべてを行うことによって 3 単位を得られる。

参加学生は，NYIT の学生だけでなく，セミナーの共同運営者であるポートランド州立大学 Tina Anctil 博士，ミズーリ大学 Brian Hutchison 博士，北フロリダ大学の Carolyn Stone 博士の指導学生など，米国各地からの参加者が大半であった。なお北フロリダ大学の Carolyn Stone 氏は Carol Dahir 氏とのスクールカウンセリングテキスト共著者で, 2006 年に来日し，お茶の水女子大学でも Dahir 氏と講演を行っている。

Ⅱ．プログラムの実際

1．1 日目　NYIT での講義　2015 年 7 月 13 日

プログラム初日は，グループメンバーの顔合わせやアイスブレーキングのアクティビティのあと，Hutchison 氏による Ferguson 暴動についての講義および Stone 氏による法的倫理的側面から

LGBT 等を考える講義があり，その後，インターナショナルスクールの移民の生徒と教師から話を聞くセッションがあった。

Ferguson 暴動は，2014 年 8 月にミズーリ州セントルイスで黒人少年Michel Brow さんが警察官に射殺され，理由なき黒人差別による殺人ではないかと市民が疑ったことに端を発する暴動で，日本でも報道された大きな事件である。白人参加者が多かったためか，また，地元ミズーリの学生も多かったためか，この講義では学生自身，自分の立場を問われ琴線にふれる部分が多い様子だった。他の人種にどう敬意を払うべきか，隔たりをどう埋めるべきかなどについてグループ討議があった。

また，Stone 氏の講義では，ゲイであることを表明したために受けたいじめや差別について，学校の対応が十分でなく転校等を余儀なくされた Derek Henkle さんが，法的手段に訴え， 2002 年に校長などと 451,000 ドルで示談解決に至った事件などが紹介された。子どもたちが自らの性的志向を表明することは，憲法で保障された権利であることが示された。他にも，2010 年に Office for Civil Rights は，教育における性差別を禁じる公民権法タイトル 9 に関するガイドラインを示したことや，2014 年版の米国カウンセリング協会の倫理コードA.11.b 終結とリファーに関する価値でも，カウンセラーが個人的に持っている価値観をクライエントに押し付けず，多様性を尊重することが明記されていることなども示された。

日本の特に若い SC 志望者にとっては，ライフスタイルの好みなど日常的な行動に反映される好みや価値観の違いは身近でも，人種や宗教といった日常生活の習慣を規定する，より根本的な価値観を意識することは少ないかもしれない。同性の保護者を持つ同性婚者の子弟への対応など，日本ではまだ多くはないが，米国では実際上支援が必要な例などもあり，多様性の拡がりとともに必要になる多様性（違い）への理解と自分の価値観やそのルーツについての理解の必要性を改めて感じるセッションであった。

続いての講義は，インターナショナルスクールの移民の生徒と教師の講話であった。英語が分からず，年齢とかけ離れた低学年のクラスに入った経験などが語られ，移民であることの苦労が生徒の立場から語られた。教師の立場からは，移民といっても亡命者もあり，それまでに暮らした国の教育制度や教育経験の有無にも生徒によって大きな差があるため，転入時には，年齢だけでなく，これまでに受けてきた教育の内容について丁寧に情報を得ることが必要になることや，保護者に対しては，学業成績がどう評価されるかなど教育システムの概要をきちんときめこまやかに伝える必要性があることが述べられた。日本の場合，上履きや掃除当番，成績など暗黙の了解事項となっている事柄の説明は，転入生や保護者が初めて日本の学校に来た場合でも，了解事項として扱われて特段の説明がなされない場合が多いように思う。外国にルーツを持つ子どもに対して，日本でも子ども自身や保護者の立場に立った丁寧な対応が求められているのではないかと痛感した。

生徒の語りからは，話すことで気持ちの整理がなされていることも感じられ，生徒や保護者が戸惑いについて語れる場の確保や，丁寧に話を聴くことも，大きな支援であることが感じられた。昨年の同じセッションでは，エレベーターのない国から来た生徒が，初めてエレベーターを見て意味が分からなかったという話もあったとのことで，国による環境や文化的な相違についての想像力を，できるだけ広げておくことの必要性も感じた。

セッションの後は，軽食の後，NYIT の講堂で，移民の体験をコミカルに描いた歌と語り，マルチメディアによるパフォーマンス「Crossing the Blvd」を全員で鑑賞した。その最後には，特別出演としてインターナショナルスクールの高校生たちが，同様のオリジナルパフォーマンスを見せてくれた。移民の子どもとしての体験を題材にしたもので，「Crossing the Blvd」の高校生版である。

高校生ならどこの国でも経験するような，友達や異性との出会い，進路への不安や保護者との葛藤などを題材に，移民という立場がどう影響するかをリアルに描いており，見応えがあった。

2．2 日目　中華街とトルコセンターでの体験 2015 年 7 月 14 日

2 日目の前半は，中華街での体験であった。マンハッタンの南東部，ロウアー・イースト・サイドにある中華街の Museum of Chinese in America（略称 MOCA）に集合し，グループ毎に昨日の体験をふりかった後，展示された米国における中華系移民の歴史を各自で鑑賞した。

グループの振り返りでは，メンバーそれぞれの民族的ルーツが話題になった。アイルランド系，東欧系，アラブ系，アフリカ系，カリブ系・・・。祖父母の代までさかのぼると多様な国名が各人から語られ，言われれば容姿にもその特徴が見受けられて，米国人の多様性は，まさに人種の坩堝といわれる混血にも由来することを実感した。100％日本人ですか？と，人種的なことを問われることは国内ではまずないと思うが，国際結婚も増え多様なルーツを持つ子は日本でも確実に増えている。人種や民族性をどう尊重するか，また資源としてそれらをどう意識するかについて，考えさせられた。

歴史展示では，中華系移民の渡米の歴史が写真や生活用具を交えて示されていた。貿易商から始まり，1848 年のカリフォルニアでのゴールドラッシュに端を発した大陸横断鉄道工事従事者として，多くの中国人が渡米したという。写真や民具からは，当時の中国文化が強く感じられると共に，炭鉱のように荒々しいカリフォルニアでアメリカンドリームを掴もうとする逞しい人々の姿が伝わってきた。鉄道工事終了時には，安価な労働力として白人の職を奪うことが嫌われ，1882 年に中国人排斥法で移民は制限される。中華街はアヘンなど暗いイメージを持たれるようになるが，1943 年に排斥法が解除され戦後は再び多くの移民が渡米する。並行して排斥法下でも，昭和初期の 1935 年ごろには 200 人から 400 人弱の留学生が渡米しており，日本の中国侵略を経て第二次世界大戦後 1949 年には 1200 人を超える中国人留学生が渡米したことが電子パネルで示されていた。多様な経緯で渡米し，互いに助け合いながらコミュニティを築いてきた中華街の歴史と誇りが伝わってきた。

展示品見学の後は，地下の講堂で「アジア系生徒のニーズへの理解と敬意を増すために視野を拡げよう」と題されたセッションで，MOCA の教育ディレクターや中華街にある学校の SC，学校心理士などのパネリストから話を聞いた。

中華系移民は教育熱も高く，子どもを法律家や医者にしたい保護者も多いため，親の期待と自分たちの生活感覚という世代間ギャップに悩む子も多いという。突然の指名で，日本での同種の問題について第一筆者からも話をした。また，アジア系の子は「恥」の意識もあって来談が難しい面があるので，SC が信頼されるためには，常に「ドアを開けておく」ことが必要という指摘もあった。日本も含めた東アジア圏の共通点を多く感じた。

参加者から活発な質疑もあり，特に印象的だったのは，アジア系の文化に知識がない SC が，そうした親子の葛藤等にどうアプローチしたらよいかという黒人学生からの質問であった。参加者にもアジア系は我々の他にはほとんどおらず，米国人にとって，イメージや知識を持ちにくい異国というイメージが多くの参加者にあることを感じた。

回答としては，たとえば親とのコミュニケーションに葛藤を感じている生徒であれば，相談室という安全な場で SC を相手に，保護者に話したいことをロールプレイで語ってもらい，その際の懸念や改善点などを，SC とじっくり話し合うことができること，そのような場合にアジア文化についての特別の知識は不要であり，きちんと生徒の気持ちに寄り添えれば大丈夫ということであった。この方法は，多くの SC が日本でも実践している

ものと思われるが，アジア文化に限らず，多文化理解や生徒支援の基本的な方法として汎用性のある支援方法であることを改めて感じた。

その後，MOCA 職員のガイドで中華街を一周した。食材店や床屋街，葬儀屋や保険会社，街のシンボル的な広場や，アヘン戦争の契機となるアヘン取り締まりを行った高官林則徐と孔子の彫像など，相互扶助と生活の場，精神的な拠り所として中華街が発展してきたことが理解できた。街には多くの人がいたが，ほとんどが中華系の人々であった。彼らの結束力や独自の文化が感じられた。

その後，中華街で食事をし，休憩をはさんで日没前からマンハッタン中心部にあるトルコ文化センターに移動した。2 日目以降も，各日の体験は，コミュニティの当事者や支援関係者からの話だけでなく，地域内を自分達で歩き，民族的な食事を現地食堂の人との交流も含めて体験するなど，文化に浸る体験が多様に組み込まれていた。

この日は，イスラム教の断食月の最後の時期にあたり，パネリストから断食の意味や断食にまつわる体験が語られた。断食中の人々の生活や祈りを解説した迫力ある映像も上映された。知識として断食の意味を知っていても，ムスリムから直接断食の主観的体験について聞くことはこれまであまりなかったので，非常に印象深かった。断食がムスリム共同体の共通体験として大きな意味を持ち，共感や自己コントロールを学ぶ大事な修養機会としであることがパネリストの言葉や態度から直に伝わってきた。日没を待って，断食月の民族的な夕食を一同で頂いた。スカーフを着用せず，外見からはムスリムと分からない女性パネリストもおり，午前中の中華系移民の世代差と同様に，移住先の文化や各自の立場・育ちによって文化変容が生じていることや，その中でもムスリムとしての精神性の継承を大事にしていることが伝わってきた。

日本にも外国にルーツを持つ児童生徒が増え，ムスリムの生徒のためにアレルギー除去食と同様にハラル食への配慮が必要であったり，断食（給食の停止）に関わる本人や周囲への配慮が必要になったりという公立学校も稀ではないと聞く。また，文化変容と共にある 2 世 3 世の子ども世代では，ともすれば祖国に親しみを感じられない場合もあろうし，祖国にも現地にもなじめなければ，根なし草になってしまう。それぞれのルーツや共有体験，精神性や家族の価値観などを通して，各人がいかなるアイデンティティを持つかを側面から支援することの難しさと，理解にむけて当事者の主観的体験を知ることの大切さを実感した。

3.3 日目　ユダヤ教会とモスクでの体験　2015 年 7 月 15 日

3 日目午前は，マンハッタンを北に出て，ブロンクスにあるユダヤ教会（リバデール・ヘブライ機関）で，正統派ユダヤ教徒の生徒のニーズについて理解を深めるセッションがあった。定例の朝のグループでの振り返りでは，中華街の印象や，カトリックでも祖父母世代では毎週金曜日には肉を食べない習慣が残っていたなど断食の多様性や共通性，宗教系の学校では他宗教の友人に出会う機会がないことなど，さまざまに感想が語られた。

ユダヤ教会では，ラビから正統派ユダヤ教徒の生活習慣などについて講義があった。牛は食べるが豚は食べない，肉と牛乳を一緒に食べない，など複雑なコーシャといわれる規則があり，それらを守る食品や店には，イスラム食のハラルマークのようにコーシャと記されているという。男性はもみあげやあごひげを伸ばし，頭にヤマカという小皿のような平たい帽子をつけ，四隅に房のついた下着を身に着けていて，少年向けにはキャラクターの模様つきの帽子もあるという。注意しているとマンハッタンの街中でも，ヤマカをつけた若者同士がベンチで語らっていたり，街を散策したりしているのを見かけた。また，安息日には機械に触ってはいけないので，自動車に乗るのも誰かにドアを開けてもらい，必要な家電製品には前夜

のうちにタイマーを設定するといった興味深い話もあった。講義の最後に，ユダヤ教の聖典が取り出され読み上げられた。

さまざまな生活習慣の話は，宗教が単に心理的なあるいは価値観としての問題であるだけでなく，それを生きるもの，生活そのものであることを受講者に実感させるものであった。日本人は無宗教が多いと言われるが，宗教の違いや私立の宗教系学校であれば教育の背景にある独自の宗教的な考え方や物の見方など，さまざまな宗教的な要素が学校にも存在している。日本では見落としやすい宗教的な要素にも，SC は注意を払う必要性があることを再認識する体験でもあった。

ユダヤ教会を出た後は，マンハッタン西部に戻り，昼食を経て，イスラム系ムスリムの生徒のニーズを知るセッションとして，イスラム文化センターのモスクに集合した。モスクでは女性受講者全員にスカーフの着用が求められ，体育館のように広く荘厳なモスク内に，スカーフでにわかにムスリム姿となった受講者が車座になった。センターの指導者から講話があり，まずシーア派・スンニ派といったイスラム教諸派についての説明，続いてさまざまなイスラムの教え（イスラム法）について説明があった。ムスリムは昼間も定時の祈りを大事にするため，それを可能にする自由業につくことが多く，ムスリム移民のタクシー運転手が多いのはそのためという説明や，女性の性的魅力を露わにすることは厳禁であるため，スカーフの着用はもちろん，ムスリム学校では女子生徒は歌や踊りを禁じられる（ダンス部や歌の授業はない）こと，娘であっても男性である父親には初潮をはじめ性にまつわることは秘密であり，幼い時から異性との同席は認められないなどの説明があった。

受講者からは，礼拝時の男女の位置や，イスラム法では認められている一夫多妻制，ジェンダーの平等と男女の処遇の差がどう両立するかや，女性の地位などに関する質問が相次いだ。

一夫多妻は，イスラム法では認められるが米国法では禁じられていること，神との間では許されることも，多様な宗教を持つ人が共存するためには，人間同士の約束である法律が「交通整理」をする必要があること，などが語られ，「契約の社会」の成り立ちを実感する議論でもあった。ゆるぎない信仰とイスラム法は絶対であるという講話からは，宗教になじみのない参加者にも，戒律は不便だから捨てよう，変えよう，というレベルでは当然なく，信仰者とそのコミュニティの生活や存在を根本から規定する強い力を持つことが伝わってきた。トルコ文化センターでの比較的柔軟に文化適応しながら精神的拠り所として信仰があるように見受けられたムスリムと，イスラム法を重視し厳格に生きるイスラミックセンターのムスリム，そしてそれらとは全く違った信念体系と生活習慣を生きる正統派ユダヤ教徒。それぞれの生の言葉をつづけさまに聴くと，あまりの違いに圧倒され，個人の持つ価値観や世界観の違いとその影響力に改めて驚きを感じる経験であった。

4．4 日目　黒人街と教会でのゴスペル体験 2015 年 7 月 16 日

4 日目は，アフリカ系米国人あるいは黒人米国人の生徒のニーズを理解するため，マンハッタン北部の黒人街ハーレム地区に赴き，Studio 美術館にて美術館の教育主事，ニューヨーク市少年団指導者，ニューヨーク市教育局ディレクター，博士課程大学院生，ソーシャルワーカーなど黒人の教育関係者から話を聞いた。3 日目が宗教者の講話であったのに対して，4 日目は多くが子どもへの支援を行う立場の人々の語りであり，支援に直結する話が多かった。

黒人の子は，その出自から，そもそも期待をかけられていないことが多く，深く考えや思いをめぐらし，表現する言葉も持っていないことが多いため，丁寧な対話を繰り返し続けていくことがとても重要であること，それによって，問われたこ

とのないことを問われ，どう問うかを尋ねられる体験を通して，深く考える言葉を子ども達自身が得ることが支援として重要であること。そのためには，問われたことのない問いを問う能力や，深く真に聴く能力が支援者には重要になるという。さまざまな壁を乗り越えるためには，「知る」ことが力になるので，学校や美術館も，ヨガや料理教室，PTA などを通じて地域に影響を与え，社会と子ども達のつながりを促進しようとしている。

人生というプロセスに必要なレジリエンスを子ども達に養うためのキー・ワードとして，社会的絆（social bonding）と社会的促進（social facilitation）が挙げられた。後者ではたとえば美術館などの社会資源の存在やそこにどうやって行けばよいのかなど，資源（社会）と子どもを結びつけていくことや，多様な職業について進路選択の可能性を伝えるなど，社会との橋渡しの重要性が語られた。ハード面の公営住宅から，ソフト面の子ども向け教育プログラムまで，包括的な支援が必要とされており，必要な支援や資源の情報を子ども達に提供するためには，支援者自身がASCA（米国SC協会:American School Counselor Association）やACA（米国カウンセリング学会:American Counseling Association）などの組織に入り，常に情報を得て自分自身に資源を豊かに持っておくことが大切という話もあった。

また，難しい事例についてどう対応するかの質問には，決して相手に敵意を持たないことが大切で，敵意は関係を切断してしまうが，敵意を持たず，SCが家族をどう理解するかを学校に伝えていけば，SCと学校と保護者がチームになれること。家族とは常に協働すべきであり，決して敵対してはいけないこと，会話は必ずつながりをつくり，さらなるコミュニケーションにつながるのであり，それを続ける教師の力を認識し教師の熱意を支えることが重要と指摘された。

低い期待しかかけてもらえず，社会とのつながりをつくりにくい子ども，しかも保護者と学校の文化差から教師にも受け入れられにくい子どもは，たとえば生活保護家庭で密かに貧困の壁にぶつかっている子どもなど，日本の学校にも少なからずいるように思う。そうした子ども達をどう社会に橋渡しするかは，特に進路の問題に直面する中学校で大きな課題と日頃から感じる。黒人街の黒人である支援者たちの話にはひと言ひと言に説得力があり，日本のそうした子どもへの支援に通じるものを感じた。期待し，丁寧に思いを問い，言葉をつむぎながら対話をしていくこと，現実の資源につながる情報や体験を提供すること，SCと学校が協力して家族との関係が切れないようにすること。いずれも支援の要点を確認した思いがした。

講話後，美術館を見学した。地域の芸術家の作品や家族向けプログラムでの参加者作品の展示もあり，地域密着で地域に発信する美術館であった。

その後，ハーレムを各自で周りながら食事をとり，午後は同じハーレムにあるアビシニアン教会で，教会の成り立ちやゴスペルを聴いた。ハーレムは，中心部をはずれれば人通りもまばらで，路上には物乞いをする人や路上で時間をつぶしているらしい人も目立った。

午後の会場であるアビシニアン教会では，まず教会の歴史が説明された。奴隷廃止論者トマス・ジェファーソン大統領時代の 1808 年に，教会内でも座席などで差別されることに反発した黒人がニューヨークで自分たちの教会をつくり，エチオピアの旧称アビシニアにちなんで名づけたのが出発点という。ボストンの黒人バプテスト牧師であったトマスポールの助けが大きく，1908年にはゴスペル運動，1920年代はじめの現在地への移転などを経て，現在では関連の老人施設や学校もあり，エチオピア支援もしていることが紹介された。礼拝の模様は教会内のインターネット設備を通じて世界に配信され，毎週観光客を含め 1000 人ほどの人が集まるという。差別と闘いつつ独自の文化とコミュニティを築いてきた誇りが伝わってきた。最後にゴスペルが独唱された。質素だが親しみや

すく，メッセージ性の高いゴスペルだった。

5. 5 日目　ヒスパニック街での体験　2015 年 7 月 17 日

最終日は，ヒスパニックの生徒のニーズ理解として，マンハッタンのアッパーウエスト地域，グッゲンハイム美術館やメトロポリタン美術館にも近い美術館街近くにあるヒスパニック街に集合して，El Museo del Barrio（バリオ美術館）でパネリストから話を聞いた。この美術館は，美術品の収集よりもコミュニティでの活動が重視され，家族向けのプログラムや，地域とのパートナーシップなどが行われているとのことで，会場も学校の美術室のような教室であった。

パネリストはいずれもヒスパニックの女性で，ニューヨーク市教育局ガイダンス・カウンセリング事務局シニア行政官，スクールカウンセラー，教師，クイーンズの大学准教授などだった。ヒスパニックはラティーノとも呼ばれるが，2010 年米国国勢調査での定義は「人種に関わらず，キューバ，メキシコ，プエルトリコ，中南米の出身者，あるいは他のスペイン文化圏やスペイン系の出自である人」となっており，スペイン語を話す人ばかりではないし，白人・黒人・インディオなどさまざまに混血し，特定の肌の色や容姿はない。たとえば有名な土産物に「ドミニカの顔のない人形」という，のっぺらぼうの若い女性像があるが，特定の容姿がないので，アーティストがいざ顔を描こうとして描けなかったために顔がないという。パネリストの一人はその人形の歌とスライドを見せて，でも（だから）自分たちには「混ざり合った遺産（Blended Heritage）」があると力説した。

そのパネリストは，自身の人生を曲線に描き，どん底だったのは，5 歳で米国に移住した時という。なぜか？と会場に問いかけがあり，回答は，全く言葉がわからず何をどうすべきかひとつも分からない幼稚園が恐怖でたまらず，毎日恐怖に泣いて登園を拒否していたからという。言葉の分からない土地に放り出され，自分とつながりが全くない世界を経験することはトラウマ的な体験であることが伝わってきた。そして彼女の人生のもう一つの底は，息子の幼稚園で参観日に，祖国の旗を取るように指示された息子が笑顔でためらいなく別の国（近隣の人たちの祖国）の旗をとった時という。DNA 検査で自分は，アジアや南太平洋の諸島なども含む複雑な混血だったという逸話も出て，支援には，自分は誰かと自ら問うリフレクション（鏡）と，他者への視座（窓）が重要とのことだった。他のパネリストからも，「米国人とは何か，それはあなたが決めること」という投げかけがあった。

移住し，祖国との繋がりと新天地でのしかも多民族多文化な地域の日常に，米国市民として生きることは，Blended Heritage に象徴される独特の気構えや，自分で自己を定義していく逞しさがいやおうなく必要とされるのかもしれない。

別のパネリストからは，自分自身の学業的成功を促進した要因と阻んだ要因を思い起こすワークが提案された。そのパネリストは，子沢山の母子家庭移民の長子として出世を強く期待されたことが一つの促進要因であり，家庭重視で性役割が明確な文化的背景の中で，弟妹の世話など家事負担は学業達成を阻む要因だったという。子ども達の学業は，個人の資質を超えて，家庭の事情やそれを超えた文化的要因によって大きく左右されていることを改めて理解して欲しいとのことであった。日本の学校現場では，言語習得の不十分から学業達成が進まない外国人生徒に対して，能力が低いと決めつけられてしまう例も少なくないように思う。こうした背景理解の枠組みをしっかりと持つことも支援者には重要と感じられた。

他のパネリストからも，結果として移住先に適応できず短期で祖国に帰る子や，不法移民の子などさまざまなケースがあり，常に新しく来た移民もいる。特に不法滞在者の子はトラウマ的な体験を抱えていることが多いので，丁寧に話を聴くこ

とや，両親の状況も含めて，子どもの持つリソースを適切に把握する必要があるという指摘があった。単に言葉を教えるだけでなく，社会情緒的なスキルの学習も重要であり，何について自分は怒っているのか，自分で理解し言葉で表現できるよう支援する必要があるという。SC が丁寧に話をし，言葉が分からなくても自分たちの悩みやニーズを表現できるようアドヴォケイトすることや，周囲との繋がりをつくることで，不本意な帰国など不適応な状況を回避できる例も指摘された。

さらには，保護者自身の罪悪感という指摘もあった。自分たちの事情や判断で，文化移行やさまざまな苦労を余儀なくされる子ども達に，保護者は潜在的に深い罪悪感を持っていることが多く，そこにも理解と配慮が必要とのことであった。

その後，美術館職員の案内でヒスパニック街の見学をした。ヒスパニック移民が細々と営む姿がかつては典型的だったという食料雑貨店や，今やそれに代わるセブンイレブン，低所得者向けの公営住宅。街角にはためくプエルトリコの国旗の前では，米国自治連邦区であるプエルトリコは，ドミニカとの独立にむけた協働でドミニカと色違いの国旗を持つようになり，1952 年に米国領となった際に，それまでのカリブ海を模したライトブルーの国旗から，米国旗と同じブルーの国旗へと変わったこと，1952 年まで独立革命運動のテロへの警戒から国旗の掲揚が禁止されていたことなどの説明があった。数分後に現れた公園片隅には，薬莢を両肩にかけたフリーダカーロ像の壁画があり，大通り沿いにはゲバラの大壁画があった。それらには禁じられたオリジナルのライトブルーのプエルトリコ旗が背景にデザインされていた。ヒップホップ発祥の地とのことで，ヒップホップやラテン音楽，スケートボードなどの壁画もあった。他にも大規模で美しい壁画が各所にあり，複雑な政治状況や貧しさの中で，カリブ海のライトブルーのような明るさや豊かな表現力を大事にしてきたヒスパニックの人達のエネルギーが伝わってきた。

Ⅲ．テキストとそこから学ぶもの

5 日間の内容は以上のように盛沢山であった。単位を取得する受講者は連日，ブログや撮影した写真にコメントを付ける作業，テキストを読む作業で多忙な様子であった。

テキストには，各マイノリティ・グループに関して，①歴史上および現代の米国の処遇，②移民の初期の状況，③共有されている価値観と伝統，④精神性と自然との関係，⑤文化変容と排斥や疎外の経験，⑥言語の違いとその強みおよび課題，について丁寧に事例等をあげて解説されていた。

たとえば，中華街訪問に先駆けて読むよう指示のあったアジア移民の章では，多くのアジア移民が自主的移民だが東南アジアからは亡命者もいることや，広く仏教や儒教の影響が大きいこと，英語では表現できない表現を可能にする豊かな言語を有するが，英語との違いが大きすぎて英語習得にしばしば困難を来すことなどが記されている。

事例として，日系米国人 2 世よしこさんが，小中高大学での日常的な人種差別（自分だけはずされるなど）を受けて，自信を失い自分から白人に話さないようになった一方で，1 世の日本人らしい振舞いや英語力のなさを恥ずかしいと嫌悪していた経験が紹介されていた。

校内の支援者が最低限知るべき歴史的事実や文化的背景，当事者の心理が理解できる仕組みのテキストである。

黒人のルーツは多くが，自主的移民でなく，奴隷として強制連行された人たちであることや，ヒスパニックの人たちの多くは，祖国の貧しさや政治情勢もあって高いスキルを持てないため，米国でも貧しく不安定な状況があること。米国領メキシコに以前から住む人は，米墨戦争によって自動的に米国民（移民）となってしまったこと，など，テキストを読んでその意味を再認識する事実も多かった。

テキストと 5 日間のイマージョン体験というプ

ログラム全体から，知識理解と体験的理解の両面から多文化理解の枠組みを拡げることができた。

Ⅳ．日本の SC 養成への示唆

ここで試みに 5 日間それぞれのキー・ワードをあげると，初日はジェンダー，2 日目は民族社会，3 日目は信仰，4 日目は肌，5 日目は血であろうか。これらは差別の対象であり，コミュニティをつくる共通基盤でもある。国際結婚や海外にルーツを持つ子どもの増加や，LGBT，発達障害なども含めて，テキストの「マイノリティ」に含まれる子どもは日本の学校でも一定数を占める。貧困や各家庭の文化的背景の違いなども，格差社会の認識の下で，以前よりは意識されるようになってきているかもしれない。いずれにせよ，多様性が少ないといわれる日本の学校でも，多くの多様性が存在する。しかし反面，集団生活や規律の重視によって多様性を許容しない傾向が指摘される日本の学校では，多文化理解が軽視されたり見逃されたりする傾向は今も小さくないように思う。

筆者のうち，初澤・宮部は博士課程，菖蒲は修士課程の大学院学生であり，昨年に続き 2 回目の参加であった。実際に現地に赴き当事者の話を直接聴くことで体験できる理解や，英語を母国語としないマイノリティとして参加することで異文化接触を追体験したことなど，セミナー参加によって，それぞれに文化的理解の必要性や枠組みについて理解を深めた。同時に，セミナー参加によって，多文化理解の必要性と共に，異なる文化を理解することの難しさや，他者への尊重の仕方自体が文化的に異なる中で，文化的に異なる他者を敬い尊重することの難しさも実感された。

また教員の立場で参加した伊藤にとっては，テキストとイマージョン体験によってダイナミックに体験学習が進む教育の在り方について学ぶところが大きかった。進学のための受験教育が重視される風潮もあってか，学生には臨床経験はもちろん，多様な生活経験そのものが不足しがちである。民族や文化，差別，宗教，といった馴染みのない事柄について実感を持って学ぶことはもちろんのこと，偏差値で輪切りになった同質性の高い生活空間から進学する学生たちには，貧困や障害，通常学級でのマイノリティの暮らしなども，リアルな全体像を掴むことが容易でない場合が少なくない。そうした学生たちにとって，本セミナーのように，基本知識とイマージョン体験がセットになったプログラムは，各人の学ぶ力に成果が左右される一方，知性と感性という心理臨床実践を支える両輪をバランスよく高めてくれる可能性を感じる。今回セミナーを実際に体験すると，自分自身の気づきのプロセスを通じて、こうしたイマージョン教育の可能性や意義を実感した。また，学習成果を，自分が撮影した写真に語りをつける映像音声つきデジタルレポートにする発想は，学生が何を見てどう感じたか，学生の視点から評価者が学生の学びを理解できる利点があり，これも興味深い工夫に思われた。

学校現場では現在も，時代の最先端を生きる子ども達が，これまでになかった課題をつきつけてくる。発達障害，トラウマ支援，ネット依存，LGBT･･･。日本では CACREP が認定するような SC 養成に特化した専門コースはなく，学校という場で必要とされる知識や技能を詳細に学べる体系だったプログラムはまだ見当たらない。しかし，異文化理解ひとつとっても，本セミナーのテキストのように，日本における戦前からの在日韓国朝鮮人や，ニューカマーと言われる人たち，IT 業種等を中心としたインドなど南アジアからの人々や外国人留学生，亡命者，それぞれの歴史や必要とする支援などについて，知識理解を深めるテキストも必要かつ有効と思われた。

5 日間という短期間であっても，文化に浸ることで，文化理解の窓口だけでなく，文化適応・文化変容の具体例や，支援の基本姿勢について具体的に学ぶことができた。米国の SC 教育における実践的なあり方を知る機会でもあった。本セミナ

ーが開始されたのは，世界の中でも多民族が集中し，本セミナーのような多文化理解のイマージョン教育を行うのに好適なマンハッタンという立地を生かし，NYIT の学生には，より積極的かつ注意深く，子ども達の文化的背景を理解できるようになってほしいという教員側の願いがあった。共同運営の北フロリダその他の大学にも，都市部・農村部など各地域で課題となる文化理解を学生に進めてほしいという共通の願いがあるという。イマージョン教育を取り入れた本セミナーは全米でも珍しい取組みであるとのことだが，NYIT では，トルコに学生と教員が赴いての類似のセミナーも実施されている。また成果としても，本セミナー履修者は，文化の違いや共通点について敏感になり，それを積極的に生徒理解に活かし，生徒ひとりひとりにそれぞれの（出自や家庭的文化的背景を含む）「物語」があることを尊重できるようになる成果があるという。セミナー実施においては，発案から実現まで，各界のキーパーソンとの綿密な折衝など，1 年以上の準備が費やされており，他地域での実現は容易ではないが，おそらく例えば東京でも，大久保地区韓国街・横浜中華街・葛西地区インド街やイスラミックセンターなどの宗教施設など，さまざまな資源の協力で類似のセミナーを計画することも可能であろう。もちろん本セミナーのように大規模なイマージョン体験を含まなくても，各自の体験事例の共有や，地域をグループで探索したりすることによって，ある程度，本セミナーのような成果が得られる可能性もある。

日本の大学院臨床コースや SC 研修では，発達障害や LGBT など各論的な授業や研修は多いが，多文化理解教育の授業が少ない（鈴木，2011）という指摘もある。多文化理解コンピテンス／スキルの本質は，異文化や文化的背景への敏感さ（センシティビティ）と尊重である。そう考えると，多文化理解のコンピテンス／スキルは，そもそも学校という異文化理解が出発点となる SC にとって，学校文化の理解も含めて，コミュニティ・アプローチと同様に，各論理解を超えた実践の基盤とも考えられる。多様な文化の異同を踏まえた，より深い生徒理解や，まさに文化的「通訳」としてのコンサルテーションは，文化的差異を見逃しやすい学校内で，SC の専門性をさらに貴重なものとする実践に繋がると考えられる。本セミナーは，多文化理解コンピテンス／スキルの意味や重要性を強く実感させるものであり，理論的理解と体験的理解を共に進める SC 養成方法として，日本の SC 養成にも取り入れることが，今後は可能かつ必要なものと考えられた。そのための取組として，具体的にどのようなことが可能なのか，また，本セミナーのようなプログラムを日本（東京で）実施するには具体的にどのようなことが必要か，それらの検討が今後の課題である。

＜付記＞　本稿は，科研費基盤（C）「国際比較とエビデンスによる日本型スクールカンセラーの実践力育成プログラム」研究代表者伊藤亜矢子課題番号：26380921 および JASSO 海外留学支援制度奨学金の補助を受けて作成した。

文献

C. キャンベル・C. ダヒア（著）中野良顯（訳）(2000). スクールカウンセリング・スタンダード：アメリカのスクールカウンセリングプログラム国家基準 図書文化社

伊藤 亜矢子(2007).　平成 18 年度国際セミナー報告 "学校現場での包括的アセスメントツールの活用" 学校現場における新しいツールの活用 平成 17 年度・18年度 COE プロジェクトⅡ国際セミナー セミナー報告書，pp101-108.

New York Institute of Technology (NYIT), School of Education (2015). *EDCO680 Counseling and Cultural Competence in a Global Society* Syllabus. (NYIT 非公刊資料).

Spradlin, L. K. (2012). *Diversity matters:*

Understanding diversity in schools. 2nd ed. Belmont, CA: Wadsworth, Cengage, Boston.

鈴木 ゆみ (2011). スクールカウンセラーの多文化カウンセリングコンピテンスの獲得に向けて――臨床心理士養成課程の大学院案内とシラバスの分析――明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻紀要, **16**, 31-47.